比較文化論　　青木深

授業概要

人間は、「わたし」とは異質なさまざまな存在――「わたし」以外の人間や、動植物や鉱物、山や海、太陽や月、死者や神々など――と関わりながら生きています。それらとの関わりを支えるための、特定の社会で共有される作法・規範・価値が、この授業で扱う広義の文化です。比較文化論では、人間の生におけるいくつかの局面に着目し、世界各地の民族誌的報告、民俗学や歴史学にもとづく日本の事例、また講師自身の生活体験などをふまえ、「問う」ことそのものを学びながら文化について講義します。

授業計画

第１回	ガイダンス
第２回	誕生の人類学（１）――自然と文化
第３回	誕生の人類学（２）――畏怖にみちた〈世界〉
第４回	人格の多元性（１）――命名の比較文化論
第５回	人格の多元性（２）――多重化する名前と身体
第６回	人格の多元性（３）――「かたり」をめぐって
第７回	飲食（と排泄）の文化（１）――食の技術
第８回	飲食（と排泄）の文化（２）――「食材」に至るまで
第９回	飲食（と排泄）の文化（３）――神々の存在と不在
第 10 回	身ぶりと言語（１）――「しゃぶる」と「しゃべる」
第 11 回	身ぶりと言語（２）――「わかる」とはどういうことか
第 12 回	身ぶりと言語（３）――声と文字
第 13 回	交換論（１）――モノ・貨幣・情
第 14 回	交換論（２）――市場社会と互酬性
第 15 回	文化としての死
第 16 回	学期末筆記試験

到達目標

この授業では、これまで「当たり前」のように依拠していた価値観がグラグラと揺さぶられることがあると思います。これを意識化すること、つまり、自文化を相対化しながら現実の多元性に「気づく」センスを磨くことを、第１の到達目標とします。さらに、価値観の動揺をともなう「気づき」から出発し、問いと思考を粘り強く重層化させていく姿勢と技術を習得することを、第２の到達目標とします。

履修上の注意

この授業では、学生の皆さんも日常的に経験している身近な素材をとりあげて講義を進めますが、内容はかえって難しく感じられるかもしれません。

数回の小レポートや予習のために、研究書や物語の抜粋、新聞・雑誌記事などを課題文として出します。それらを読むことを楽しみ、正解のない問いに向かい合う意欲をもった学生の参加を期待します。

こうした点に注意して履修するかしないかをよく考え、受講希望者は必ず第１回のガイダンスに出席して下さい。また、正当な理由のない遅刻が続く学生には履修を認めません。

予習復習

授業では、数回の課題（A4 用紙に手書きで１枚程度の小レポート）を通して予習と復習をすることになります。課題が出ない回でも、次の週に使う予定の文献を読んできたり、授業プリント（自分で書き込んだメモを含めて）を読み直したりたりして理解を深め、「問う」技術を磨いていきましょう。

評価方法

学期末の筆記試験 50%、授業参加（数回の小レポート課題、各回のリアクション・ペーパーなど）50%の比率で評価します。欠席については本学の規定にしたがって対処しますので、実習・通院・就職活動・クラブ活動など特別の場合をのぞき、５回をこえて欠席した場合は筆記試験を受ける資格を失います。

テキスト

テキストは使用せず、プリントを配布します。参考文献は毎回の授業で紹介します。